

『子ども理解の大切さ』

私の教職歴は、22年間は教諭として、14年間は管理職として勤めました。学級担任を務めたのは連続24年間で、新採用教員1年目から教頭となってからも2年間学級を受け持っていました。

学級の子どもの数が少なかった時には、個々の子に目を行き届かせることができたのですが、一番多くて46人の子を受け持っていた時には、学級内のすべての子どもに目配り気配りが行き届かず、今、当時をふり返ってみても、子どもたちにすまないという思いがよみがえってきます。

テストの採点だけでも相当な時間がかかりますし、家庭学習ノートや班日記に目をとおりコメントを書き込むことにも時間がとられます。今こそこの時間をつかえるとせっかくのチャンスをつかんだとしても、そういう時に限って子ども同士のトラブルが発生し、その対応に時間がとられたりと、往々にしてそういうことが多かったような気がします。

さて、この多人数学級の担任だった頃に悩まされていたことは、学級に馴染めない子がいた、学習が成り立っていない子が何人かいたということです。

学級に馴染めない子の中には他の子と協調することができなく、言い争ったり喧嘩したりと特定の相手ではなくかわりをもった子のどの子ともトラブルになるのです。したがってほぼどの相手からも「わがままで」「あまえている」などと批判され、しまいには、かわらない方がいい子というレッテルを貼られたりします。修学旅行の班づくりの時などには、班のメンバーとして受け入れられずに担任としてもほとんど困ったものでした。

しかし、このように表だって言動や表情が見える子は状況をとらえることができるのですが、表情を出すこともなく、言葉で自分の気持ちを伝えることのない子もいました。普段からおとなしく、人とトラブルを起こすこともなく、誰の迷惑や邪魔にもならないので、常に他方に視線を多く注いでいる担任は、その子の胸の内を聞いてみようとする言葉がけなどないまま過ごしてしまったのです。

また、学習の成り立っていない子というのは、授業中に注意散漫で話をまったく聞いていないとか手遊びや絵をかいて遊んでいるというわけではなく、真剣に学習にむかっているのですが、なかなか理解できないとか、書く、読む、計算などの学習作業に極めて時間がかかったり、文章を読んでの理解ができていなかったりという様子が常に見られる子です。

しかし、そのような子たちの様子はとらえられても、40人近い学級の授業は指導計画に則り、どんどんと進めていかなくはなりません。教科の進み具合を学年部会で打ち合わせているため、遅れると他の学級に迷惑をかけるという焦りもあり、授業についてこられ

る子どもたちに合わせて進んでいきます。学習の成り立っていない子たちへの細やかな配慮はやはりおろそかになってしまいます。きっと、その子たちにとっては、理解しかねる授業の時間というのは、ただ我慢を強いられる時間に過ぎなかったことと思います。

授業時間中に十分に手を差し伸べられなかったから、放課後、教室に残して個別にくり返し学習させようとしたり、できなかったことを家庭でやってくるように指導したりもしましたが、学習の成り立っていない子たちにとっては、それは単に苦痛でしかなかったと思います。

その当手をふり返ってみて、子どもたちに対してすまないという思いが残るのは、担任としての力量が足りなく、何よりも子どもたちを正しく理解していなかったということに尽きます。学級に馴染めない子や学習に遅れのある子について「わがままで」「努力が足りない」という思いを心の奥底に潜めていたのかもしれませんが。忙しかったから、人数が多かったからというのは何の言い訳にもなりません。実に恥ずべきことです。

今、さまざまな発達障がいに関する理解が深まっています。これまで「育て方が悪い」「性格が悪い」などと処理されがちだったが、実は大きな間違いで、何らかの障がいによるものであることがわかってきました。障がいがあるからといって、それはけっして他から中傷を受けたり差別されるものではありません。非社会的、反社会的行動につながる障がいではないのです。発達障がいについては程度の違いこそあれ、誰しもが持っているといってもよいのではと考えています。

学習障がいをかかえた場合、計算することにとりかかることがまったくできなかつたり、文を読むことができなかつたり、話したり読んだりできるのに、文字を書くことができなかつたりなど、特定の場面で極端に学習することが停滞してしまうことがあります。そのことは、単にわからない、できないということではなく、脳の内部に何らかの原因があるそうです。また、自閉的傾向をかかえている場合、人とかかわり方がぎくしゃくし、自らの意思でもコントロールすることができない何らかのこだわりが、人と協調したり相手の思いを受け入れたりすることへの妨げとなるようです。これらの障がいと正しく理解されていないとさまざまな誤解が生じ、障がいをかかえる子にとっては成長過程において大きな不利益を被ることにもなります。

すべての子どもたちへの教育支援は、将来を見据えての自立を大きな目的としています。そのためには、できるだけ早期からの教育支援が極めて重要となります。個々の子どもの持つ特性や傾向を早い段階で正しく理解し、その後の適切な教育支援のあり方を見定めていくことが、その子の将来の幸せにつながります。